

## 第2回

# 田原市・渥美町による新市のまちづくり講演会

日時 平成16年10月8日(金)  
会場 渥美町文化会館文化ホール  
講師 高千穂大学客員教授 アジア研究交流センター顧問  
山本雄二郎 氏  
主催 田原市・渥美町合併協議会

# 今ふるさとを想う

## 変わる時代の流れ

【司会】 大変長らくお待たせをいたしました。ただいまから「第2回田原市・渥美町の合併による新市のまちづくり講演会」を開催いたします。

今日は、ご多忙の中、たくさんの皆様にご来場いただきまして、まことにありがとうございます。講演に先立ち、今日は、新市の将来を担う小学生の皆さんに「僕の夢・私の夢」という作文を発表していただきます。当会場の地元小学校、渥美町立福江小学校6年生の皆さんにお願いをしました。書いてくれた全作品は、お手元に配付してあります。

それでは、6年生の皆さんを代表して、山内裕加さん、原 雅洋君、よろしく申し上げます。

【原】 渥美町立福江小学校 6年生組 原 雅洋です。

【山内】 渥美町立福江小学校 6年生組 山内裕加です。

【原】 僕は6年生男子の「僕の夢」の一部を発表しますので、聞いてください。

【山内】 私は6年生女子の「私の夢」の一部を発表しますので、聞いてください。

【原】 まず、はじめに僕の夢です。 6年生組 原 雅洋。

「僕の夢は、おじいちゃんやおばあちゃんの仕事のアサリ取りを手伝い、家業を継ぎたいです。」

【山内】 次は、私の夢です。6年生組 山内裕加。

「父と同じ大工になりたいです。祖父が病気なので、介護のしやすい工夫した家を作りたいです。」

【原】 次からは、友達の「僕の夢」です。

6年生組 佐々木初希

「ぼくの将来の夢は、昔お父さんがめざしていたコックになって、有名になりたいです。」

【山内】 私も次からは、友達の「私の夢」です。

6年生組 杉浦 彩

「ブライダルコーディネーターになって、一生に一度の結こん式の手助けをしたいです。」

【原】 6年生組 渡會 司

「陸上の未続選手のようにオリンピックに出てみたいです。そして、未続選手の記録をぬきたいで

す。」

【山内】 6年花組 杉江理紗

「私は、洋服屋をつぎたいです。雑誌やテレビをよく観て、流行の服をたくさん店にだしたいです。」

【原】 6年星組 青木翔吾

「僕の夢は、サッカー日本代表の選手になり、楢崎選手をこすゴールキーパーになることです。」

【山内】 6年星組 川口千紗

「私の夢は、看護師になる事です。身体の不自由な人や小さい子供たちの役に立ちたいです。」

【原】 6年星組 天野駿也

「ぼくの夢は、人の役にたつロボットを作って喜んでもらうことです。」

【山内】 6年星組 清田彩花

「私の夢は、お父さんのような料理人になることです。皆においしい料理を食べてもらいたいです。」

【原】 これ以外にも、僕たちは(私たちは)、ひとり一人いろいろな夢を持っています。

【山内】 (僕たちも)私たちも一生懸命がんばりますから、どうか一人でも多くの夢をかなうことができるような立派なまちをつくってください。

【原・山内】 お願いします。

【司会】 ありがとうございました。

続きまして、本日の主催者であります、田原市・渥美町合併協議会会長 白井孝市よりあいさつ申し上げます。

【田原市・渥美町合併協議会会長：白井孝市】 皆様、こんばんは。

今日は、大変足元の悪い日になってまいりましたが、合併協議会の主催によります新市のまちづくり講演会を開催させていただきましたところ、大変大勢の皆様にご参加を賜りまして、まことにありがとうございます。

ただいま、子供さんがそれぞれ将来の夢を語られました。そして、私どもに「立派なまちをつくってください」というお願いもございました。合併協議の方も、大変皆様方にいろいろご心配をかけ、ご負担をかけまして、二転三転いたしました。ただいま進めておりまして、本日もございまして、5回目の協議が済んでおります。ただいまの子供さんたちの期待に応えるように、私たちも将来の地域づくりを目指し

て、合併をぜひ成功させていきたいと思っておりますので、どうか皆様方の格別なご理解とご支援をお願い申し上げます。

特に、当面、いろいろな話の中では、心配事とかいろいろありますので、ご意見もあろうかと思っておりますが、やはり、私たちは将来の10年、20年、あるいは30年後の渥美半島を見まして、ぜひこの地域が一本になって力を合わせていくべきだと、このように思っておりますので、どうか格別なお力添えをお願い申し上げます。

今日は、合併協議が始まっておりますが、皆様方に、どういうご参加をいただこうかなと思ひ、とりあえず、この講演会を開催いたしまして、皆様方と一緒にまちづくりを少し考えてみたいということで、今回、3回の講演会を計画させていただきました。

本日は、今、渥美半島の出身者の中で一番活躍しておられる方ではないかと思ひます、山本雄二郎先生をお招きして、講演をお願いしたわけでございます。後ほどまたプロフィールのご紹介があらうかと思ひます。

山本先生は、たまたま私どもと年代がよく似ておまして、私が成章中学の1年のとき、先生は2年生でございまして、大変頭脳抜群な方で、当時、並みいる秀才を抑えて級長をやっておられた、非常に印象の深い方でございまして、将来、活躍されるだろうなと思っておりましたが、その後、産経新聞に入られて、論説委員をやられ、このことだけでもすばらしいですが、ただいまは高千穂大学の客員教授ということで、現在、私どもの想像を超える活躍をしておられます。例えば、成田空港とか、今回の中部新国際空港にもかわりがございまして、ご専門は観光、運輸とか、こうしたことでございますので、日ごろ大変ご指導いただいておりますが、先生に「ふるさとでお話しをしたことがございますか」と言ったら「ない」と言うものですから、これはぜひひとつ、皆様方にふるさとを想うお話をさせていただき、そして、我々のために渥美半島のこれからを導いていただきたいと、変わる時代の流れを導いていただきたいということで、今日は無理にお願いをして、皆様方お話をいただくことになりました。どうか、楽しんでご清聴を賜りたいと思ひます。

それからまた、合併協議につきましても、今申し上げましたように、これから先のことを考えていきたいと思ひますので、どうかご協力のほどをお願い申し上げます、ごあいさつといたしたいと思ひます。

では、よろしく願いをいたします。

【司会】 ありがとうございます。

続きまして、当協議会副会長 原 功一よりあいさつ申し上げます。

【田原市・渥美町合併協議会副会長：原 功一】 原でございます。

大変、台風が心配されておる中、足元の悪い中、このようにたくさんの皆さんにご参集いただきまして、ありがとうございます。

今年の5月23日、住民投票以来、急速に進めております合併協議は、ただいま田原市長の白井さんから説明がありましたが、渥美町は2回目、田原市は3回目ということで、合併については少しはなれているというような感じもありますが、早い時期にという、私の選挙に出たときの公約を守りまして、皆様に

お願いをして、ただいま進めております。いろいろなことがあります。変化の時代に入っておりますので、意識も変えていただいて、事に当たっては、今までと違った内容も出てまいります、それは将来を見据えてのことであるということで、この地域が本当に10年先、20年先、「よかったな」と、子供たち、孫たちにとっていい地域にしていきたいと考えております。先ほど6年生の生徒が言いましたが、ずしっときました。「いいまちにしてください」と。そのような頑張りをしております。議会ともども、皆様のお力をおかりして、いい知恵を集めて、この地域を押し上げていきたいと、そういう意味で今日は開かせていただきました。本当にありがとうございます。

今日お招きした山本雄二郎先生は、我が町の福江の出身でありまして、2001年の議会だよりに「私のふるさと渥美」ということで寄稿されております。先生は昭和5年生まれということでありまして、同級生の方も今夜はおみえだと思いますが、18年までおられ、以来、離れまして、五十数年経つということなんです、そのときの文を読みましても、大変ふるさとへの想いが深いということで、こんなことが載っております。「お盆の時期には必ず帰省するようになってきました。今では両親の墓参が主な目的になってしまったが、その二、三日の滞在のときほど心休まるおもいを味わえるときはない」ということで、ちょうどお生まれになったのは、ご存じだと思いますが、福江橋のたもとです。観音橋があって福江橋があるということで、山本さんの隣のうち。たまたま、幸運にも私がおつき合っているのが、今、その実家の跡をとっている山本一廣さんですが、自治会等々を一緒にしておりまして、昨日もちょっと寄りまして、こうしてお見えになるからと言いましたら、「恥をかきに行くようなもんだな」というふうに頭をかいておるということですが、先ほど市長の紹介にもありましたように、大変優秀な方でありまして、学徒として豊川海軍工廠でも昭和20年に爆撃があったということで、大変な経験もありまして、それから、早稲田大学、そしてまた、ご紹介にありましたように大変優秀な成績をもってその世界で活躍されて、今はご存じのように、国の中でも重要な方になっています。特に、空港問題等々は非常に造詣が深くて第一人者であると、そういうふうに思っております。我々のふるさと渥美が誇るべき人が、大変お忙しい中、今日は来ていただいたて、「今ふるさとを想う」という題材で、変わる時代の流れの中で、皆様に夢のある話をしていただけるということを期待しております。

今夜は、本当に先生をお迎えして、それがこの渥美半島の合併に本当に貴重な礎になるということを感じております。本当に今日はありがとうございました。よろしく願いいたします。

【司会】 ありがとうございました。

それでは、講演会を始めたいと思います。

本日の講師は、現在、高千穂大学客員教授としてご活躍されております山本雄二郎先生にお願いしております。プロフィール等につきましては、お手元の資料にてご案内をさせていただいておりますので、ごらんください。

それでは早速、山本先生に「今ふるさとを想う - 変わる時代の流れ - 」と題しましてご講演をいただきます。

皆さん、拍手でお迎えください。(拍手)

【高千穂大学客員教授・アジア研究交流センター顧問：山本雄二郎氏】 皆さん、こんばんは。

ただいまご紹介いただきました山本でございます。白井市長、原町長には、大変過分なご紹介をしていただき、ありがとうございました。

本日は、この田原市・渥美町合併協議会の新市のまちづくり講演会という立派な講演会にお招きいただきまして、感謝をいたします。これから、「今ふるさとを想う - 変わる時代の流れ - 」というテーマでお話をさせていただきますが、こんなに多くのふるさとの皆さんを前に、どこまで役に立つのか、あるいは参考になることをお話できるか、大変心もとなく思っております。ただ、私といたしましては、そのサブタイトルにありますように、変わる時代の流れ、世の中が大きく変わってきているというところに力点を置いてお話をするつもりでおります。その流れの中で、私自身も多くのことを経験いたしましたし、また、自分自身も変わったなというふうに思っておりますので、その点についても触れてみたいと思います。

そうは言いましても、ご紹介いただいたように、私はかなり長い間、交通、あるいは観光という、言ってみれば狭い分野に入り込んでおりまして、今日ここにいらっしゃる皆さんから見れば、あんまりなじみのない話であったりする可能性があります。また、物の見方とか考え方とか、抽象的なことをお話することになるのではないかなという点を心配しております。

いずれにいたしましても、今は非常に変化の激しい時代でありまして、そのご説明と、それから、私自身がその中でどんなことを体験したかということをお話することに時間を割くことになると思います。その上で、当面、最大の変化とも言える田原と渥美の合併の問題、これにどういうふうに対応していったらいいか、皆さんと一緒に考えてみたいと思っております。

これからお話申し上げようと思っておりますことは、お手元のペーパーにおおよその内容を書いてありますので、これに従ってまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

最初に、「生まれ育ちは渥美半島」と、こう書いてありますが、自己紹介を兼ねまして、私が今どんな立場にあって、どんな道を歩いてきたかということをお話させていただきたいと思っております。

私は、昭和5年、1930年の生まれでありまして、74歳になりました。考えてみると、ちょうど20世紀の70%を生きてきたという計算になります。ただ、ふるさと離れて60年近くなりまして、年に1、2度帰って来ることはありますけれども、だんだんと遠い存在にふるさとがなっているなという感じがいたしますし、そのことを自分でも残念に思っております。その福江橋のたもとと書いてありますが、これもご紹介がありましたように、昔の所番地でいうと、私は福江町字下地31番地で生まれました。これはもう福江橋のすぐそばということなので、そこに書かせていただきましたが、私の生家、生まれた家は、製糸業、繭から生糸をつくるということ生業としておりました。これは私の祖父が始めたようですが、今はもう、当然やっておりませんけれども、その痕跡が保美のところに高い煙突が残っております。あそこに工場がありまして、そこで生糸をつくっておりました。

福江小学校に入ったのが昭和12年、1937年でありました。既にこの年には日中戦争が始まりまして、だんだんとこの戦時色が濃くなる、そういう時代でありました。当時の福江というのは、今から考えてみると、貧しかったという言い方はおかしいかもしれませんが、少なくとも今の暮らしとは全く違う暮らしをしていたように思います。それはその個人、あるいは地域がどうだというのはなくて、日本全国が多分同じような状況であったのだらうと思うんですが、その頃の渥美半島は、今の言葉で言えば「過疎地」だ

ったのではないかなというふうに思います。どこかに行くにしても自動車なんかは当然ほとんどありませんし、移動手段は基本的には徒歩、歩くということでありました。自転車もあるにはありましたけれども、数がほんのわずかしかない。それから、ものの輸送はなぜか牛車、牛が大八車を引っ張って運ぶということが多かったように思います。馬車、馬が車を引っ張っている記憶はほとんどありません。また船がかなり使われておりまして、福江港が大変栄えていたことを記憶いたしております。これも今の言葉で言えば、港が物流基地であったと、こういう言い方になろうかと思っております。

その当時のことを、今回、こちらに何うということになったので、いろいろ思い出そうとしてみたんですが、なぜか余り多くの記憶がありません。小学校6年生のときに修学旅行で伊勢神宮に一泊で行ったということは覚えておりますが、余り記憶が定かではありません。先ほど、6年生の皆さんの「僕の夢・私の夢」を聞いておりまして、果たして、当時の私は一体どんな夢を持っていたのかなと、これもなかなか思い出すことができません。いずれにしましても、当時は今から考えると、想像もつかないような生活をしてきたということだけは言えるように思います。

そして、昭和18年、1943年に田原の成章へ進学いたしました。当時は愛知県立成章中学校という言い方でありました。そのころは戦争中のせいでしょうか、学区制になっておりまして、老津から半島の先までは田原と、こういうふうに決められておりました。中学、今では高校に当たるんですが、渥美半島には成章しかありませんでしたので、みんなそこへ行くということになっておりました。今から思えば、20kmぐらいの距離ですから、本当は通って通えないはずはないんですけども、当時はバスはもちろん走ってはおりましてけれども、とても通学に使えるような状況ではありませんでした。一時期、自転車で通ってみたことがあるんですが、当時は自転車の性能も悪いし、道がデコボコだし、それから、特に風が強くて、冬の西風なんていうのはもうほとんど前へ進まないというようなことで、これはやっぱり無理だなというので、私は田原に下宿をしました。寄宿舎へ入った人もいます。したがって、私が親と一緒に暮らしたのは小学校6年生まででありまして、もう大分前に私の母は亡くなりましたけれども、晩年、もう90歳近くなってから、電話がかかってくると、「おまえ、ちゃんと鼻をかめよ」とか、「ヘソを出して寝ちゃいかんぞ」と、こういう電話がかかってきました。だから、私の母から見れば、私は小学生のイメージのままずっときたのかなと、こんな感じがいたしております。

これも皆さんがお聞きになると「えっ」と思われるかもしれませんが、私が田原へ行ったときに、大変なカルチャーショックを受けました。カルチャーショックというのは、あまり今まで見たこともない文化や知らなかった習慣とか、そういうものを知って驚くという意味ですが、それは一体なぜかという、まず、電車が来ておりました。毎日電車が走っている。当時は渥美半島の先端まで渥美線を延長する計画があったようでありまして、福江にも駅舎がほとんどできかかっておりました。今の元の役場のそばのバス停、あれのもう少し山側のところに小さな駅舎ができかかっておりました。だから、いずれ、電車を通うのかなと思っておりましたが、戦争のおかげで線路が敷かれることもなく、線路敷はほぼできておりました、その一部は今でも道路として使われておりますが、とにかく、遠い国という印象が私の第一印象でした。

それからまた、病院があってベッドがある。ベッドぐらいの話は聞いたことはありますけれども、当時の渥美病院は、今のようなあんな立派な渥美病院ではありませんで、木造平屋建てだったと思います。私

の友達が入院したので見舞いに行ったら、ベッドがある。それを見て、「あっ、これがベッドか」と、そんなようなことで、わずか20kmで、当時の福江から田原へ行った少年は、カルチャーショックを受けたというのは、これは決してオーバーではありませんで、私ものちに外国へ何回か行きましたけれども、外国へ行って受けたカルチャーショックよりも田原へ来たときの方が大きかったように思います。そのことを何かに『はじめての外国』、そういう題で短い文章を書いたことがあります。当時の私としては、これは本当に大変なところへ来たもんだなというふうに思いました。

それからもう一つ、これはカルチャーショックとは言いませんが、ちょっとこれからOHPを見ていただきますけれども、英語を習いました。当時は英語というのは敵性語、敵の言葉だからあんまり勉強しなくてもいいというふうになってしまうんですが、その英語を習ったときに、これは1年生のときです。たしか、「ジョンは毎朝パンとバターを食べます。」と、こういう文章だったと思うんですが、英語で「bread and butter」と、こう出てくるわけです。「Bread」というのは辞書を引いてみると「パン」と書いてある。それはパンぐらい知っておりましたのでそうかなと思いました。それで、今度は「Butter」とは何だろうなと思って、薄っぺらい英語の辞書を引いたら、カタカナで「バター」と書いてあるわけです。バターと言われたって何だかわからないので、薄い国語辞典を引いたら「牛酪」と書いてある。牛酪もわからんかと、しかし、牛があって、酪農の酪があるから、何かこれは牛乳を何とかしたものなのかなと、こんな感じでおりました。念のために「牛酪」を引いてみたら「バター」と書いてある。結局私は何が何だかわからなくて、多分これは白い液体で、何か加工した、そんなものかなと、こう思って、そのときは終わりました。それから数年たって東京へ行って、下宿しているとき、そのバターなるものが出てきました。見ると、何か黄色いような色をして、液体ではなくて固体であるわけです。「ええっ、おれは一体何を思っていたのか」と。なめてみたらこんな味かと、こうやって食べるものかと、大学へ入るまでバターがわからなかった。だから、多分、当時は私だけではなくてみんなそうだったんだろうと思うんですけれども、そういうふうに田原へ行って、電車を見て、ベッドを見て驚いた。また、英語でバターを辞書で引いて、結局何だかわからなかったということでした。

こんなようなことをやっているうちに戦争がだんだん激しくなって、昭和19年、1944年の夏に学徒動員というのが当時ありまして、みんな戦争のお手伝いをするということで、豊川海軍工廠にまいりました。私は当時2年生、先ほどの市長が1年生、みんな寮に入れられて、24時間を三つに切って、夜中から朝まで、朝から夕方までというふうに交代で一生懸命で高射砲の弾とかをつくった時期がちょうど1年続きました。当然、勉強なんか全然やりません。昭和20年、1945年、もうあと1週間で戦争が終わるといって8月7日、その豊川海軍工廠が大空襲を受けました。米軍のB-29爆撃機が何機ぐらいでしょうか、相当たくさん飛んできて、朝から爆弾を落として攻撃をしたわけです。二千何人の方が亡くなりました。私の同級生もその中に入っております。これは今から考えてみると、広島へ原爆が落ちたその翌日のことで、そのすぐ後にまた長崎に原爆が落ちるわけですが、たった1週間ぐらいの違いでそういうことがあったことをきのうのこのように思い出しております。

戦争が終わって、また成章に戻りました。ところが、戦争中の教科書を使ってはいかんと言うんです。特に歴史とか地理とか、そういう教科書はほとんど使えない。そうすると何を勉強したのか、これも記憶がだんだん薄れてきましたけれども、国語でいえば『徒然草』とか、そういうものを一生懸命で暗記した

記憶があります。通算、成章に5年おりまして、昭和23年、1948年に卒業して東京に行きますけれども、後で振り返ってみて、成章の5年間って一体何だったんだろうかと、ろくすっぽ勉強した覚えもないし、ただ言えることは、私が成章にいた5年間は、戦争があって、終戦があって、その後の混乱期があって、大変時代が激変した時期だったんだろうと思います。自分では気がついておりませんけれども、多分、その時期に大きく変わったのではないかなというような感じがいたします。

1つだけ言えることは、当時、豊川の海軍工廠で一緒に寮生活をして、空襲から一生懸命逃げたりした、いわば一つ釜の飯を食ったというような意味で、仲間との連帯感は、これは先輩、後輩も同じことですが、非常に強くなったような気がいたします。先ほどの白井市長は私の1年下におられました。今や大田原市の市長になりました。1年上の私は級長だったか何か知りませんが、しがな大学の教師の成れの果てと、これも時代の変化のあらわれかなと、こんなふうに思っております。

それで、次の農村地帯出身の効用と書いてありますが、これは余談です。

渥美半島というか、当時の渥美町福江は、半農半漁という言葉が当たるのではないかと思います、さっきから申し上げているように大変貧しい地域であったと思いますけれども、しかし、自然の中で、あるいは自然とともに生きてきたなという感じがいたします。特に土にはかなり親しんできたというふうに思います。私は東京に行ってからつくづく思いましたが、東京の不忍池という有名な池がありますけれども、あの周辺を歩いてみたら、舗装してあるのかなと思ったら、昭和20年代の前半ですから舗装はしてありません。ただ、人が踏み固めてしまったので、もうカチンカチンになっていて、足跡なんかつきません。ところが、この辺の道もそうでしたし、そういうところを歩くと大体土というのは柔らかい、弾力があるので、しかも、場合によってはそこに足跡がつくと、これが土だと私は思っているわけです。当然、そういうところはデコボコしておりますから、何かの加減でござを敷いて座っても、下手に座ると体が傾いたり、ひっくり返ってしまうと、こんなようなことが今ははっきりと覚えております。

なんでそんなことが印象にあるかと言いますと、これはちょっと脱線気味ですが、私は現在、成田空港の問題で、今はほとんどいなくなりましたが、反対派と空港をつくらうとした国との大反対闘争が展開された時期があって、それを話し合いで解決しようということが今から17年前に始まりました。国と反対同盟が話をするとき、行司役がいるだろうというので、いわゆる学識経験者5人が選ばれて、相撲でいえば行司の役をやったわけで、5人いた中で4人は、偶然でしょうけれども東京生まれ、東京育ちの方で、東京の学校を出ているという方ばかり。私だけが愛知県の農村地帯に生まれて、というポジションにありました。それでいろいろやりとりをしているときに、反対派、これはほとんど農民ですが、その人たちがいろいろ話している間に私にだけ通じる話があるわけで、さっき言った畑のところのデコボコのことだとか、やっているうちに「何だ、こいつはえらそうな顔しているけど、おれたちと同じ人種じゃないか」ということで、大変親しみを持ってくれるようになりまして、17年前ですから、それから8年ぐらい話し合いを重ね、繰り返すわけですが、私が行くと割合話が通じると、それは彼らがおれたちと同じ土俵にいる男だと思ったからだろうと思うんですけども、そういう意味で、農村地帯で生まれ育ったという、その効用というのがあるのかなということを思ったことがあります。ただ、最近のこちらの農業は温室であり、ビニールハウスであって、私が知っている当時の農業とは大分変わってきておりますので、そういうような感覚がどうなるのかなと、これは全く余計なことですが、思ったりしました。

いずれにしても、農村地帯で生まれ育ったことの意味というのはやっぱりあったんだなと、つくづく思いました。

お手元のペーパーでは、その次の「この道40年～交通・観光」のところに入ります。

ここから先は、私自身が実社会へ出てからのことをお話することになります。

ちょうど、私が学校を出て50年になります。そのうち、32年間新聞社にいました。次の15年が大学にいました。その大学も今は定年で卒業して、既に3年経ちました。その50年のうち40年弱、交通とか観光の問題に関係をしておりましてけれども、これはもう一つ一つお話をしたら切りがないくらい時代が変わる大きな変化があって、その渦巻きの中に私はいたような気がいたします。

新聞社から大学へと書いてありますが、昭和29年、1954年に学校を出まして、新聞社へ入りました。最初の10年ぐらいは政治記者、今は時々テレビのニュースなどをご覧いただいていると思いますが、例えば、小泉首相が官邸のある場所へ出てくるとみんなでわーっと取り囲んで、いろいろ質問したり、何かする、例えて言えばあんなようなことを10年やっておりました。ただ、今と時代が違いまして、当時あった自由党と民主党、これは今の自由党、民主党とみんな違いますが、保守合同一緒になって自由民主党をつくるとか、あるいは、右派社会党と左派社会党があって、それが一緒になる社会党統一というようなことがちょうどあった時期でありまして、私もそういう現象を追いかけて、2大政党が形成していく過程をずっと見てきたような気がいたします。それが約10年。残りの20年ちょっとは、論説委員というのをやりました。この論説委員といいますのは、ある特定の分野を担当する、専門といってもいいかもしれませんが、そういう専門を持って社説を書いたり、何かをするのが論説委員で、いわゆる第一線の記者とはちょっと違います。

そのとき、私が担当したのが交通・観光でありまして、20年近くやっておりますと、ほかの新聞社の人よりも当然私が一番古いわけです。「門前の小僧習わぬ経をよむ」ではありませんが、聞きかじりでも何でも、それだけ長くやっていると、結構いっばしの専門家面して通るようになりました。本当は中身は大したことはないんですけども、世間ではそれで通るようになりました。例えば、政府の運輸政策審議会の委員とか、航空審議会の委員とか、そんなようなことをやってみたりして、現実に国の政策をつくる、あるいは実際に展開していくことのお手伝いというか、参画ということがずっと長く続きました。一つだけ毛色が変わった審議会を経験いたしました。それは国語審議会というものでありまして、当時は当用漢字表というのがあって、1,200何文字、この漢字を使ってやっていこうねという決まりがあった時代ですが、これではちょっと少なすぎるので、見直そうということで、私は新聞社の代表の1人としてそのメンバーに入りました。それで、現在も使われております常用漢字表というのをつくった経験があります。これはちょっと変わった経験で、8年間やりましたけれども、私もそういうことをやった関係で、自分では漢字のことを非常に神経を使って、使う、読む、書くというような、今、立場にあるような気がいたします。

それはともかくといたしまして、交通の分野でいえば、昭和40年代、1955年以降というのは、一番何が問題であったか、今思い出してみますと、交通事故です。自動車の事故によって死ぬ人がうなぎ登りに増えるので、これを一体どうするかということで大変問題になりました。結果的に、昭和45年、1970年が交通事故による死者の数がピークの年になりました。確か、一万六千何百人で、この勢いで増えていったら

一体どうなるんだと。交通を担当する私としては、もっと安全対策に力を入れなければいけないと。その安全対策も交通安全教育も大事だけれども、交通安全施設をきちっと整備することが先ではないかということを書いたり、話したりしてやってまいりました。当時、道路交通法というものの改正が行われようとしておりまして、それを担当しておりました警察署の担当官、まだ40ちょっとぐらいの方ですが、1万6,000人を半分にするとするんです。つまり、8,000人を目標にするということを宣言して、その取り組みを始めたわけです。私は「あなた、冗談でも、今、こんなに増えているときに、横ばいとか、とめるっていうのはわかるけど、半分だなんて大丈夫かね」と言った覚えがあります。法律が変わって、いろいろな対策がとられるようになって、だんだん交通事故が減りました。数年後に八千何百人まで来て、それからまた増えて、ずっと1万人代の時期が続きますが、ごく最近、飲酒運転に対する取り締まりを非常に厳しくしたおかげで、多分今、史上最低8,000人の前半、そういう状況になってきたと思います。この二十数年かかりました。昭和40年の半ばごろは、そういう交通事故をどうしたらいいかということで、オーバーに言えば走り回ったような気がいたします。

その次が、国鉄改革。当時、国鉄というのは日本最大の輸送機関であり、これは公共企業体といって、国営ではありませんが、限りなく国が関与している、そういう全国1社でやっていた日本国有鉄道というのがあったんですが、これがもう大赤字でした。昭和50年代に1年間に1兆円を超す赤字が出るようになったわけです。5年経てば5兆円の赤字というようなことで、累積債務も当時20兆円ぐらいあったのではないかと思います。このままではつぶれてしまう。ではどうするか。どうするかといっても国がやっている明治以来百十何年続いた国鉄を簡単に右から左へというわけにはいきません。しかも労働組合が幾つかあって非常に強力な存在で、どうするかというので、これもいろいろなことをやって、結果的に昭和62年、1987年にご承知のとおり、分割民営化、今のJR、この辺でいえばJR東海とか、東京の方でいえばJR東日本とか、貨物を含めて七つの会社に分割されて、民間会社になりました。これも今から考えてみると、あんなことが当時よくやれたもんだなと思います。政府の施策としても、私みたいな下っ端はどうでもいいんですが、当時、分割民営化なんていうと、散々抗議の電話や手紙が来まして大変な思いをしたものです。しかし、私は別に信念とかというのではなくて、常識的に考えて、こんな親方日の丸で赤字を垂れ流して、幾らどんな赤字が出て、毎年何千人も人を採用して平気であるような、これはもうもたないなと思っただけですが、だから何とかしなければというので、頑張ったつもりですが、そういうふうに、その時々によって大きな変化が起こり、それにまた自分が巻き込まれるという生活をずっと続けておりました。

最近では、航空、飛行機が飛ぶとか、その飛行機が飛ぶ場所、空港、それにかかわることが大変多くなったのと、もう一つは、コミュニティバスです。これは、今、田原でぐるりんバスというのが走っておりますけれども、こちら辺でいえば豊鉄のバスのような普通の会社がやっている普通のバスではなくて、地方自治体が何らかの形で絡んで、普通のバスが行かないようなところへバス路線を展開するというものです。これは全国で随分ふえてまいりましたが、今からもう10年以上前、東京武蔵野市というところで、第1号が誕生しましたが、その第1号の誕生に私も参画して頑張りました。初めは、どうなるかなと思ったんですが、その東京武蔵野市のむーバスというんですが、これは今黒字でもうかっています。田原のぐるりんバスは、これは条件が違いますから比較はできませんが、まだ日が浅いし、ちょっともうかるころまではいってありませんが、路線によっては乗り切れないほどお客さんがおられて、路線によってはほとんど

お客さんがいない。まだこれからだと思いますが、そういうバスの問題も手がけるようになりました。

こういうふうに新聞社に32年いたうちの20年ぐらい交通の問題をやっておりましたので、人があいつは専門家だというふうに誤解だか、錯覚をしたおかげで大学へ行くようになりました。大学では交通論とか物流論とか、そういうような科目を担当しまして、15年やってきております。これも一つだけ言えば、この辺のことをお考えいただければおわかりのように、私が交通の問題を手がけた40年ぐらい前、こんなに自動車が普及するとは、この辺では1軒に2台とか3台とかあって当たり前みたいなことになるとは夢にも思いませんでした。そのころ、モーターゼーションという言葉がありましたけれども、自動車がものすごい勢いで増えるという状況、そのこと自体が大きな変化であり、それがまた社会を大きく変え、さらにまた、人の行動、物の考え方を変えるという状況が起きているなということをつくづく思っております。

その次に、中部国際空港、名古屋空港と書いてありますが、40年近く交通・観光の問題をやっていたことを図式的に簡単に言うと、それまでは鉄道と船舶時代であったのが、自動車と航空の時代になった。それが40年間の、一番簡単に言えば大きな変化だったと思っております。これは構造的な変化だと私は思っておりますが、一つ一つ申し上げている時間がありませんので、空港に限ってこれからお話をさせていただきます。

空港がなければ当然飛行機は飛ぶことはできません。飛行機は当然空港のあるところを目指して飛んでまいります。今、全国に民間航空が使う空港は全部で95あります。この狭い国土にこれだけたくさんの空港があるというのは、世界では日本だけでありまして、ほかにはこんな例はありません。民間航空、これは実は昭和27年までは、当時の占領軍によって一切禁止されておりました。日本は戦争をやって、陸軍、海軍が航空機を使って攻撃したので、民間航空があるとまたそれがいつ兵器に変わるかわからないから、一切飛んではいけないという指令が出ました。したがって、昭和20年から27年は一切航空というのは存在いたしませんでした。講和条約が結ばれて、日本も国際社会へ復帰すると、それなら航空も認めてもいいかということで、27年から始まったわけです。それから考えると、ちょうど50年ぐらいになりますが、当時、空港の数は十幾つかしかなかった。それから見ると、今は95ですから、短い期間にいかにたくさんの空港ができたか、おわかりいただけると思います。

ただ、それは数だけを言った話であって、国際拠点空港という言い方をいたしますと、私が航空を担当したときには一つもありませんでした。国際拠点空港というのは、非常に規模が大きくて、国際線を主として展開する空港という意味ですが、現在は成田、関西、それから、来年の2月17日に開港する中部、この3つの国際拠点空港が現実存在しております。成田にいたっては、ちょうど40年ぐらい前に、ここへ空港をつくるということを政府が地元の意向を聞かずに決めてしまったために、大もめにもめて、反対闘争が起きました。それで、激しい反対闘争で、その中で死人が出る、自殺者が出る、大変悲惨な状況が続きますが、昭和53年、1978年に開港いたします。そこでちょっと一段落というか、トーンダウンしまして、にらみ合いが続くわけですが、いつまでもこんなことをやっていてもしょうがないぞということで、話し合いに転換することになって、それがさっきお話した成田空港の学識経験者として司会役をやったという話につながっていくわけです。その後、シンポジウムとか円卓会議とかという公開の場で、向こうの方に国と空港公団、こちら側に反対派、農民集団、正面に私ども学識経験者5人で、ちょうどこういう場で、皆さんの見ている前でやりとりをして、何が問題だったか、どうするかというのを約5年やりました。会議

だけでも何十回やりました。やっと何とか、話し合いでいこうねということに決めて、そのときに使われた言葉が「共生」、これは後でもう一遍出てまいりますけれども、ともに生きる「共生」という言葉でありました。

現在、私は、成田空港地域共生委員会の代表委員、責任者でありまして、ちょうど今、5期10年やって、今年いっぱい10年目の任期が終わるところです。その先はどうなるかわかりませんが、おかげでという変ですけども、反対派の外に過激派というのがいまして、大体あいつはけしからんと、そんなどうせだますだけだということで、彼らの機関紙などを見ると、私の名前が呼び捨てで、私だけではありませんが、そういう学識経験者の名前が呼び捨てで書いてあって、断固粉碎すると、こう書いてある。こうなると、私は私ごときを粉碎しても何も意味がないとは思いますが、警察は放っておくわけにはいきませんので、私は今17年間、24時間ずっと警備されるという非常にばかな身の上になっております。これが一体いつまで続くのかわかりませんけれども、しかし、私が今やっているのは「共生」、ともに生きるということです。今、私が共生というのに非常にこだわるのは、最後の方でお話いたしますが、実は、新しく生まれる田原市、今まで既に存在する田原市では共生ということをおっしゃられます。そこで、私は非常にびんときまして、波長が合います、「そうだ、これだ」という今、気持ちになりかかっています。そのなぜだということをお話していないのでおわかりになりにくいと思いますが、出発点は、成田で共生ということをやっているということだけを知っていただければと思います。

それから、その次に関西国際空港。これは大阪湾の沖に5 km離れたところに人口の島をつくって、その上に空港をつくりました。何でそんなところにつくったかと言いますと、伊丹空港がもういっぱい、しかも、周りが騒音で大変なので、拡張するといっても場所もないし、騒音問題で成田はあれだけでもめたんだから、もう海の上へつくってしまえと、こういうことになったようです。成田の場合は内陸空港といひまして、畑、山林をばつとつぶして、空港をどかんとつくりましたので、周りは農地があり、森林があり、農家があり、商店がありと、もうそういう四方全部がそうです。そうすると、航空機が飛ぶたびに騒音がします。あそこは朝6時から11時までで、24時間ではありませんが、うるさいといえぱうるさいです。で、今、立ち退きをするとかいろいろやっておりますが、そのために大々的な反対闘争が起きたのだから、そういうことはやめようということで、海の上に関西空港をつくるということになりました。では、どういう方法、やり方でその空港をつくるのか。埋め立てにするか、浮体工法といひまして、ものすごく大きい鉄の箱、航空母艦をイメージした方が早いかもしれませんが、それを海の上へ浮かべて空港にするか、どっちにするかというようなことを航空審議会の関西国際空港部会というのがありまして、私もそのメンバーで、投票までやって決めた覚えがあります。だから、その二つ目の国際拠点空港にもかわりをもっておりました。

三つ目、中部国際空港。これもご承知のように知多半島常滑沖、これは陸から1 kmちょっと。関西のように5 kmも離れておりませんが、やはり同じように人口の島をつくって、その上に空港島をつくりつつあります。ほぼでき上がりました。中部国際空港をどうするかというのは、話としては20年ぐらいあったわけですが、ああ、こうだといろいろな意見があつて、なかなかまとまらない。たまたま私が渥美半島の出身であったこともあるし、どうも航空とか空港に詳しいらしいということで引っ張り出されまして、いろいろ議論に参加しました。6年ちょっと前に株式会社として空港会社が発足しました。私は、その空

港会社の非常勤監査役ということで、非常勤ですから月に1回か2回しか行きませんが、6年間ずっと通っておりました。今年の6月、第3期目に入って、向こう4年間、また非常勤監査役をやることになっておまして、この3つ目の国際拠点空港にもかわりを持っておるわけです。

要するに、私が一番最初に、交通にかかわったときには影も形もなかったものが、今はもう全部形になって、できてきているということをおっしゃっているわけです。これも大変大きな変化であって、その中で私もいろいろな経験をいたしました。

もう一つ、名古屋空港とここに書いてあるのは、今の名古屋空港は来年の2月16日まではずっと使えますが、そこでぴたっと終わって、翌17日からは常滑沖へいきます。国際線も国内線も全部いってしまいます。そうすると、残った名古屋空港はどうするんだと。あそこは自衛隊の小牧基地ですから、黙って放っておけば軍用空港になってしまう。それでいいのかということで、小牧市とか豊山町とか春日井市とかは「冗談じゃない」と、皆さん言っておられる。結局、これもいろいろ議論があって、愛知県知事が県営空港、県が責任持ってやる空港にするというふうに言いましたので、これからは小型機とか、ビジネスジェット機とか、あるいは、災害用の救難機とか、そういう小さい飛行機を中心とした空港として生まれ変わります。これは愛知県では都市型総合空港という言い方をしておりますが、そういうふうには、今なりかかっているわけです。これも、今、なりかかっているというふうに言ってしまうと簡単ですが、ではどうするんだという話が、何年でしょうか、続きまして、私もその渦巻きの中で大騒ぎをやったことがあります。くどくなってしまうかもしれませんが、空港一つを例にとっても、この長い間、随分変わってきています。その中で私もかかわってきて、私自身も変わるんだなということをつくづく思っております。

その次に、観光立国の展開と書いてありますが、これも、私だけかもしれませんが、今までにない大きな変化だと思っております。かつて、観光と言えば、どこかへ旅行に行くなんていうことは、これはもう不要不急、あってもなくてもいい話で、物見遊山なんていうのは、一体なんだとってさげすまれる、そんなような状況があったような気がいたします。最近では全く逆転しまして、国の最重要政策課題、これだけは力を入れてやろうという目標になりました。観光立国です。観光で国を立てるという方針がはっきりと打ち出されるようになりました。私も、観光を40年近くやっておりますが、平成元年だったと思えますけれども、1980年ごろ、「21世紀の観光のあり方について」という、これは運輸政策審議会という政府の諮問機関の中に、国内観光小委員会と国際観光小委員会というのがありまして、国内はどうする、国際はどうするという議論を随分やりました。国内観光小委員長が私でありまして、国際観光小委員長は、当時、東大におられた西洋歴史学の権威の木村尚三郎先生だったわけです。

脱線しますが、私と木村先生は同じ年の生まれでありまして、木村先生が昭和5年4月1日、私が昭和5年7月13日。4月1日というのは学年が1年上になるんですね。だから、たった3カ月しか違わないのに「おれが先輩だ」とか言って、酔っぱらうと必ずいばって、「そんなにいばるなら、あんた、おれをご馳走しろ」とか言ってやっていたことがあるんですが、国内観光、国際観光なんて分けている場合かねということをお二人で話し合いました。これをもう一本化にして「21世紀の観光のあり方」という報告書を出した覚えがあります。今、木村先生は、この観光立国懇談会の座長だとか、愛知万博のテーマ、コンセプトをつくる委員長とか、華々しく活躍をされております。私はそれから比べればほんのわずかなものでありまして、最近では観光立国の一環として、外国人の旅行者を倍にしようとしています。今は1年間

にちょうど500万人ぐらいで、日本人の海外旅行者は1,800万人ぐらいですから、日本へ来る外国人がかなり少ない。だから、これを2010年までに1,000万人にしようと、こういう方針が決まっているわけです。

倍になると何が起きるかという、いろいろな問題がありますが、その一つに通訳が絶対足りなくなる。これは想像がつくと思います。では通訳をどうするか。現在の通訳は、これはもう昭和24年の法律ですけども、通訳案内業法という法律があって、ものすごく難しい試験を受けて、それを通ると、免許を受けることができるということになっています。今どき免許なんていうのはほとんどありません。規制緩和時代ですから、これを登録制に変えようという構想があるわけですが、今まで通訳をやってこられた方、これは何千人単位ですけども、自分たちの既得権益が侵害されると大反対されました。だけれども、それはわかるけれども、しかし、足りないものは足りないんだからどうしましょうということで、今、国土交通省の中で通訳問題を検討する委員会のようなものができまして、一昨日から始まったんですが、今、私が座長をやっております。木村先生はそういう大観光をやって、私は小観光をやって、この間、飲みながら笑ったものですが、いずれにしても、「観光がこれほど脚光を浴びるとは思わなかったよね」と、木村先生と話し合ったものです。これも随分変わってまいりました。

もう切りがないのでやめますけれども、交通の分野、空港を例にお話したこともそうですし、観光もそうですけれども、本当にありとあらゆる分野で、交通に限っても大きな変化が起きております。その影響を私が受けないわけはありません。しかし、考えてみると、これは実は皆さんも同じではないかなということをお話していきたいと思えます。

「新しい風の中へ」、これ、ちょっと文学的な表現ですけども、ここからは合併についてです。今は田原市ですが、前の田原町と赤羽根町、これが合併して田原市。その次が、今度は渥美町も一緒になって田原市になるというふうに伺っておりますけれども、これもかつては考えられない大きな変化だと思います。昭和30年に、やはり市町村合併がありまして、例えば、福江町と泉村と伊良湖岬村が合併して渥美町になったというふうに、その時代に1回あります。それからまた、今回の合併。これはもう大変大きな変化でありまして、新しい風が吹こうとしている中で、これに一体どう取り組んでいったらいいかということをお話して皆さんと一緒を考えてみたいと思っております。

構造改革のうねりと書いてあります。構造改革というのは、最近では、小泉首相の専売特許みたいにみえておりまして、彼は特殊法人改革と称して、道路公団とか郵政公社とか、そういうのをどうかしようと今頑張っております。内閣改造も郵政改革に協力しなければだめだなんて言って、ある意味で乱暴といえど乱暴ですけども、あれも構造改革の一つで、社会全体から見れば、いろいろな構造改革、あるいは構造変化がありますけれども、私がどうしても注目しなければならない問題の一つは、少子高齢化です。子供の数が減って、総体的にお年寄りの数が増える。既にこういう兆候がはっきり見えておりますが、これからさらに進みます。その結果、当然、予測されることが人口の減少ということになります。これは大変だぞと、皆さんはおっしゃいます。私も大変だと思います。しかし、大変だけれども、本当に悲観すべきことかどうかというのは、これはちょっと違うと思えます。

人口が減るといいますけれども、これをよく細かく見てみると、旧田原町と、それから、渥美町、もっと先へいけば旧福江町、そう比べてみると、こっちは減っているけれど、こっちは増えているとか、いろいろな問題が多分出てくると思えます。そこで、私が申し上げたいのは、確かに大きい変化、少子高齢化、

人口減少というのは、これはもう避けて通れない問題ですけれども、悲観するだけでいいかなという気がするわけです。人口が減るといいますけれど、どういう人口が減るかということを考えておく必要があると思います。定住人口、そこに住んでいる人の人口、夜間人口といってもいいかもしれませんが、これはやはり減ることがあると思います。ところが、交流人口。あっちへ行ったり、行き交う人口は逆に増えるのではないのでしょうか。なぜならば、交通手段が非常に発達しました。新幹線、自動車、ジェット機、それだけ見たって簡単に移動ができます。それから、さっき申し上げた観光立国のように物見遊山というのは、そんな悪いことではなくて、今、人間が人間らしく生きるためには必要なことだよと、こういうふうな時代になってきたので、行き来をする人の数はかえって増えるのではないかと思います。人口減というと、確かに定住人口は減るでしょうけれども、交流人口が増える可能性があるということを考えてみれば、これは、私は決して悲観することではないのではないかと思います。

構造改革、構造的な変化がある、それを改革する、対処する。これは今言った人口問題を取り上げててもそうであります。その他、いろいろな問題があるでしょう。今度、大きい田原市になったときに、当然、またいろいろな問題にぶつかります。産業をどうするか、教育をどうするかとか、いろいろな問題が出てくると思います。私は、いろいろな人がいて、いろいろな見方があって、いろいろな意見が出てくるのは、これはある意味で当然だと思えます。しかし、百家争鳴、あるいは小田原評定のように、ただ議論だけしていて、どこまでいってもらちがあかないというのでは、これは困るわけです。どこかで集約して、目標を決めたら行動を起こすと、こういうふうにしていくことが、きわめて抽象的な話になって恐縮ですけれども、構造改革という大きなうねりがある中で、一番大事なことはないかなと思います。具体的に何かということは今ここで申し上げる立場にもないし、時間もありませんが、物の考え方としては、前向きにとらえてやっていくということがどうしても必要だなというふうに思います。

その次に、地域活性化への挑戦と書いてあります。これは、さっきから繰り返し申し上げておりますように、社会にさまざまな分野で、いろいろな変化が起きてきています。それは、私は前向きにとらえていくべきだというふうに申し上げましたけれど、そのことを言いかえてみれば、挑戦していくと、こういうことにつけるのではないかなと思うんです。これもいろいろありますけれど、観光を例にとって申し上げてみたいと思います。

つい先日ですけれども、愛知県のというか、名古屋でと言った方がいいんですが、ある人が「半島観光」ということを言っておられました。愛知県で半島観光といえは、対象は今度、新空港ができる知多半島と我が渥美半島なわけです。これはそれぞれの生い立ち、歴史、文化、その他違いますので、一概には言えませんが、地理的に半島であることは、これは全く共通しているわけです。その名古屋で話したその人は、「半島観光、知多半島と渥美半島を何かの形で連結というか、ドッキングできないかな」と、こういうことを言っているわけです。私も、「それはいい話だよ」と言って、後で考えてみました。

確かに知多半島は、中部国際空港が来年2月にできる。渥美半島に比べれば、やはりいろいろな工業、工場とか、ああいうものが多いように思います。特に東海市の周辺では基幹産業が展開しておりました。物づくり的な要因が強いです。これは事実だと思います。それにひきかえ、渥美半島は、とても知多半島とまではいきませんが、トヨタの最新鋭工場があり、それから、むしろ産業といえは、これも当然含まれると思うんですが、農業という言い方をすれば、これはほとんど日本一に近いレベルであります。観光も

自然的な要因、歴史的な要因です。自然的な要因でいえば白砂青松、伊良湖岬というようなものがありますし、歴史的な要因でいえば渡辺嶺山かもしれませんし、保美貝塚かもしれません。これも渥美半島固有の要因があると思うんです。それがくつつくかどうかというのは、これはやり方の問題ですが、一つだけ、はっきりしているのは、渥美半島は今度合併によって一つの行政体になります。

知多半島の方は、合併の話が進んでいるらしいんですが、現段階では5市5町、五つの市と五つの町があって、一本化しておりません。しかし、こちら一本化するので、かなり動きやすいと思います。それはともかく、相手方がどこであれ、知多半島のどこかの市なり町と連絡を取って、話をつけて、調整をすると、「ああ、そうだね。一緒にやれるね」というようなことが私は出てくるのではないかと思うわけです。

現実にごこういうことがありました。私は今、成田の問題にかかわっておりますが、成田の人たちが、今度、田原のトヨタ工場と中部国際空港の見学をしたいと言っているわけです。彼らの言うことを聞いていると、東京から新幹線で豊橋へ来て、レンタカーを借りて田原へ来て、ずっと上を回って行って、名古屋から南下して常滑へ行って、新空港へ行くと言っているものですから、「いや、あなたたち、そんな余計なことしなくたって、レンタカーを借りるなら豊橋から田原へ行って、トヨタの工場へ寄って、それから渥美半島をずっと縦断して、ちょうどいいところで昼飯を食べて、伊良湖岬からフェリーに乗って、師崎へ行きなさいよ。師崎から今度またレンタカーで北上して、南知多温泉か美浜町へ泊まればいいじゃないか」と言いました。美浜町の町長は大変ユニークな方で、私も昔から存じあげているんですが、その町長を表敬訪問したいということで、これは11月のことですが、朝9時に、一行11人が町長を訪ねるわけです。私も同行いたします。それが終わったら、また北上して常滑へ行って、空港を見学して、終わったら熱田神宮を参拝して、名古屋から新幹線で帰ってくるというふうに、ずっと半円を描いて移動する、こういうコースを、きのう聞いたんですけれども、決めたと言っています。「ああ、それはよかったね」と、私は言いましたが、最初に名古屋の方が半島観光というようなことを言っておりましたけれども、この場合は半島観光という言い方になるかどうかわかりませんが、一つの例として言えば、そういう例だってあるわけです。

そのかわり、その一行が田原のトヨタ工場、美浜町長、中部国際空港に事前に連絡を取って話をつければいいけません。それをずっと移動するのは道路であり、フェリーであり、また道路であると、こういうことになります。やっぱり私は、半島観光というはまだ具体的にどうだということが決まっていらないようですが、いけるのではないかなという気がいたしております。愛知県に愛知県観光協会というのがありますが、そこの方が、「いやいや、じゃあやってみようかな」と、こう言っておりますので、やってみようかな言うぐらいなら、まず、渥美半島、それから知多半島、両方に声をかけて、みんなで相談をしてみなさいよと。私は知恵がありませんけれど、お節介なものですから、声をかけたらいつでもいくよと言っておりますが、意外にそういう方向に動いていくかもしれません。

これはイメージで言えば回廊というか、英語で言えばコリドー（corridor）これが半島観光のイメージの一つかなと思っております。ただ、その場合に、一つの町、一つの市だけでやろうとすると大体うまくいかないと思います。幸いにして、渥美半島は一つの市になります。相手の知多半島が5市5町だからちょっと困ってしまうんですが、その中の有志でいいと思いますが、広域的に連携をすれば、半島観光の可能性が私はあると思います。これは半島観光だけを例に取り上げておりますが、一般論として言えば、

地域活性化、自分たちの地域をどういうふうに生き生きとしたものにしていくかということが課題になるわけで、それに挑戦する必要があるということを言っておるわけですが、このポイントは、私は市民、例えば、ここにいらっしゃる皆さんがそうであるように、市民レベル、そういう人がまずよりより集まって、知恵を出し合い、汗をかいて、力を合わせる、そして行動を起こすことが出発点でなければいけないと思います。

例えば、白井市長や原町長をつかまえて、あんだ、やりなさいよと、こういうことをやってくださいよという、それも言わないよりはいいかもしれませんが、それでは私は物事の順番が違うと思います。市民レベルでそこまで知恵を出し、汗をかき、力を合わせて行動を起こせば、それだったら市としてここまで協力できるねということになるかもしれません。だから、物事の手順前後といいますが、取り組み方をまず間違いないようにして、この地域の活性化に挑戦していくこと、これが新しい田原市の課題の一つかなと思います。これも口幅ったいことを、しかも抽象的な形でしか申し上げられませんので申しわけありませんが、方向はそっちではないかなと、こう思っております。

それから、その次に、合併進展の意義と書いてあります。これは皆さんの方がお詳しいので、私ごときが申し上げることはないんですけども、現在の田原市と渥美町が合併して、新しい市ができるということが本決まりになったと聞いております。私はそこで連想いたしました。旧田原町、旧赤羽根町、今の渥美町、これは、一本一本の矢であれば、簡単にぽきんと折れるかもしれません。毛利元就の故事が教えるように、三本の矢が束になったときは、これは相当な力になるのではないかと、こういうふうに思います。私の知っている範囲で、誤解があるかもしれませんが、確かに田原市は財政力も豊かだし、力があります。こういうとしかられるかもしれませんが、現在の渥美町はとてもそこまで到達しておりません。そうすると、水は高いところから低いところへ流れる。だから、嫌だという人もいるかもしれない。逆に、いや、そういうふうに平準化して、一緒にしてやるからこそ次の発展にいけるんだという方もあるかもしれません。多分、今もいろいろなお意見があるだろうと思うんですが、私は三本の矢の例え、これはちょっと、場合によっては時間がかかるかもしれませんが、この三本の矢が束ねられて、物事に当たっていけば、これは間違いなく新しい展開が開けるだろうと思います。

そこで、ちょっとこれからまたOHPを使わせていただきますが、私がこだわった共生ということが出てくるのではないかなという気がいたします。田原市の将来都市像とでも言うんでしょうか、これを拝見いたしましたところ、これからどっちの方向へ行くかなという方針の中に、「ガーデンシティ」、漢字で書けばここにありますように「田園共生都市」というのがあります。この田園共生都市、この共生という言葉にこだわって、後でもう一遍OHPで映し出してご覧にいただきますが、黙って放っておくと、この共生というのは、非常に立場が違う、分野が違う、意見が対立する、立場が違う人が仮にいたとしても、相手の存在をちゃんと認めて、相手を尊重して、何事も話し合いで解決して、穏やかにやっていこうねというのが本来のというか、今まで使われてきた共生の意味だそうで、田原市の場合は、この田園共生都市に「うるおいと活力のある」という形容句がついて言っております。ガーデンシティ、豊かな自然と活性化された経済活動、生き生きとした住民生活、自治体としての自立といったような力強いイメージをあわせ持つての経済自立、住民自治による協働や環境循環の社会システムができるような都市を目指す。そういう意味で田原市の場合は共生という言葉を使ってガーデンシティという言い方としているわけです。

私は、さっきから成田で、反対派も国も、立場の違いがある。殺し合いまでやった。しかし、そこに終止符を打って、一緒に力を合わせてやっていこうと、マイナスをなるべく減らそうということでやってきました。そういうことで共生委員会というのがあるわけですから、これに非常にこだわるわけです。その私がこだわる共生を、田原市がこういう形で使われておることに、さっきぴんときたというか、共感を覚えているというふうにいったのはそういう意味です。

ここから先、ちょっと余計なことを申し上げることになるかもしれませんが、ちょっと変な横文字が出てくるのでご勘弁いただきたいんですけど、この横文字自体はどうでもいいんですけど、「Symbiosis」というのは辞書を引くとさっきの「共生」と出てきます。「Conviviality」という英語も辞書を引くと、ちょっとストレートですが、やっぱり「共生」なんです。この二つのどこがどう違うかということをやっと、回りくどい話になって申しわけありませんが、申し上げておきます。

今申し上げたこちらの「Symbiosis」の共生というのは、立場が違う反対派と賛成派、しかし、お互いに相手を認めて、穏やかに話をして、仲よく暮らしていこうねと。最小限、マイナスを一番少なくしよう、これがこちらの共生であると言っていいと思います。だから、私は、一言で特色を言えば、同じ共生でも、「マイナスの削減」、あるいは「縮減」、減らしていくということだと思っております。

こっちはちょっとニュアンスが違っておりまして、この「Conviviality」は形容詞だとしますと、辞書を引くと「お祭り好き」とか、「宴会大好き」とか、要するににぎにぎしく、わいわいがやがややると、そういう形容詞です。それが名詞形になっているわけです。同じ共生でもこっちはわいわいがやがや、みんなで肩組んで、歌でも歌ってもいいからにぎやかにやっていこうよという共生であるわけです。一方がマイナスを減らすのを特色とすれば、こちらはプラスの創出、プラスをつくり出すところに特色があると言っていいと思います。今まで共生というと、ほとんどこの言葉を使っております、私の共生委員会という名刺の英語のところを見ると、やっぱりこの共生を使っています。しかし、これからは、これもいらないというのではなくて、これもあってもいいけれど、むしろ軸足を置くとしたら、こっちへ行ったらどうだということを田園共生都市の田原市に、私は申し上げたいような気がするわけです。

もう一遍さっきの田園共生都市を見ますと、これは非常にいいネーミングだと思うんですけど、ここに今、赤いアンダーラインが引いてある共生は、私が言う「Symbiosis」もいいけれど、むしろ、どちらかといえば「Conviviality」、みんなで仲よく、知恵を出し、汗をかき、力を合わせてというその共生で、ぜひいいいただきたいというのが、大変口幅ったいことですが、この合併進展の意義と、こういうふうに申し上げておきたいと思います。

先ほど市長にもちょっと伺ったんですけども、今、協議会が続けられておられますけれども、細かい話を含めて、合併が実現するまでには乗り越えなくてはいけない、随分たくさん問題があるだろうと思います。しかし、さっきの繰り返しになりますけれど、三本の矢の例え、旧田原、旧赤羽根、現在の渥美、これがみんな力を合わせていけば、必ず何かができると思います。これをやり遂げることにこそ合併の意味があると思います。そういう意味で、これもまた抽象的でおしかりを受けそうですけれども、ぜひ、その方向に行っていただきたいと思います。

先ほど、市民レベルでと申し上げたので、皆さんの方も余り難しく、しゃちほこばって考えないで、よし、やってやるかと、少しぐらいアルコールが入っていてもいいですから、わいわいがやがやと、こうい

うことにいったときに、私は次の新しい展開が生まれてくるし、それがあって初めて合併を進展させることの意義がはっきりと見えてくると、こう思いますので、口幅ったいことを申し上げておきます。

最後に、これもまたおわびしなければなりません、本当に、「何をおまえ言っているんだ」と言わんばかりで、あまり役に立つことも言っておりませんし、参考になることも言っておりませんが、私が既に離れて60年近くたちますけれども、年齢のせいもあるかもしれませんが、何か今、かえってふるさとというのが私の胸の中にずしんと響いてきています。今回、たまたまこういう機会をいただいたので、余計にそうなのかもしれませんが、私は、この新しい合併によって、必ず何か新しい発展と飛躍が生まれることを信じて疑っておりません。皆さんにぜひ頑張っていたいただきたいと思います。

私がお手伝いできることは本当にごくわずかで、あまりありませんけれども、もし、「おまえも福江の生まれなら、こういうとき一汗かけ」と言えば「わかりました」と言って東京から来るともできると思います。少なくとも名古屋、これからは常滑ですが、月に1回や2回はここら辺を新幹線で通っております。ただ、のぞみですから素通りになってしまいますけれども、今度はひかりに乗って、場合によってはこだまに乗ってやってまいります。ですから、せっかく機会を与えられたことに対して、改めてお礼を申し上げますとともに、もし、私にできることがあったらお声をかけていただければと思います。

たまたま白井市長がさっきから申し上げているように、私とほぼ同世代で頑張っておられます。原町長もすぐ近所の方で大変お世話になっております。こういう方が市長であり、町長である。これは私個人にとって大変心強く、非常にうれしいことであると思いますので、お二人にはそれぞれの自治体のリーダーとして、健康にも留意されて、ますますご健闘をお願いしたいと思います。

この後、何かご意見、ご質問があればということなので、私はしばらくここにおります。私の方からの一方的なお話はとりあえずこれで終わらせていただきます。

長い時間、ご清聴いただきましてありがとうございました。

(拍手)

【司会】 どうもありがとうございました。

それでは、せっかくの機会でございますので、ここで質疑の時間を設けたいと思います。山本先生にお聞きしたいことがございましたら、挙手をもってお願いいたします。

よろしいでしょうか。

それでは、質疑の時間を終了させていただきます。

本日は、大変すばらしいお話をお聞かせいただき、有意義な講演会を開催できましたことを厚くお礼申し上げます。

それでは、山本先生にご退場いただきます。皆様、いま一度盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

(講師退場)

【司会】 ありがとうございました。

最後にお知らせですが、10月26日火曜日、午後6時30分より、田原市文化会館文化ホールにおきまして、講師に田原市出身の愛知大学名誉教授 河合秀敏先生をお迎えし、第3回講演会を予定しておりますので、

ぜひご来場いただきますよう、ご案内申し上げます。

以上をもちまして、講演会を終了させていただきます。

本日は大変ありがとうございました。